



2026年2月20日

第2回「自殺の表現」に関する映像・舞台関係者向け勉強会 ～自殺や自傷に関連する企画・制作・表現を行う際に知っておきたいこと～

2026年3月26日（木） 13時00分～14時15分 オンライン開催

厚生労働大臣指定法人・一般社団法人 いのち支える自殺対策推進センター（東京都千代田区、代表理事・清水康之、略称「JSCP」）は2026年3月26日（木）、映像・舞台制作・製作関係者等に向けた、自殺や自傷に関連する企画・制作・表現のための勉強会を開催いたします。

本勉強会では、NHK エンタープライズ エグゼクティブ・プロデューサーの小松昌代氏を迎え、終末期病棟を舞台としたドラマ『お別れホスピタル』（原作・沖田×華、出演・岸井ゆきの・松山ケンイチ・古田新太他）の企画・演出・映像化のプロセスを紐解いていただきます。原作に描かれている患者の自殺や、過食嘔吐・自傷行為を繰り返す人物等の表現について、どのように考え、どう描いたのか、留意した点などを含めて伺います。

WHO が映像制作者向けのガイドラインなどで記しているように、脆弱な状態にある方がメディアの影響を受けることがあることは様々な研究結果から示されていますが、作品中で自殺や自傷をどう描くかは「表現の自由」にもかかわるものであり、絶対的な正解はありません。当センターにも、メディア関係者や映像関係者からご相談が寄せられることもあり、現場で悩んでいる方々と共に模索を続けていきたいと考えています。

近年、配信市場の拡大等により、日本の映画・アニメーション・ドラマの海外進出が目覚ましいことが伝えられています。日本のコンテンツ（IP）が自殺リスクを高める可能性を避けながら世界で広がるよう、舞台・映像表現の関係者のみなさんの参考になる材料を提供したいと考えています。

〈当日のプログラム（予定）〉

時間	プログラム *順番は予告なく変更することがございます	登壇者
13:00	開会の挨拶・日本の自殺に関する概況（15分間）	清水康之（JSCP 代表理事）
13:15	ウェルテル効果を防ぐために ―WHO ガイドラインの紹介 「自殺対策を推進するために 映画制作者と舞台・映像関係者に知って もらいたい基礎知識」（15分間）	JSCP
13:30	『お別れホスピタル』事例紹介と JSCP からの質問（30分間）	小松昌代氏
14:00	参加者からの質疑応答（15分間）	小松氏・清水
14:15	閉会の挨拶	JSCP

〈登壇者 プロフィール〉

■小松昌代氏（NHK エンタープライズ エグゼクティブ・プロデューサー）

フリーを経て 1999 年 NHK エンタープライズ入社。数々のドラマ番組を手がける。主なプロデュース作品に連続テレビ小説『おひさま』、大河ドラマ『花燃ゆ』、土曜ドラマ『少年寅次郎』『お別れホスピタル2』、ドラマ10『はつ恋』『プリズム』『しあわせは食べて寝て待て』など。

【本勉強会開催の背景：「ウェルテル効果」「パパゲーノ効果」とは】

洋の東西を問わず、歴史的にも文学、演劇、映画、ドラマ、アニメーション、マンガ等様々な表現の中で、自殺や心中が描かれることがありました。一方、近年は様々な研究によって、メディア（報道、映画、ドキュメンタリー、ドラマ等のテレビ番組）が自殺リスクを高めたり、逆に自殺を抑止したりする可能性があるという科学的根拠が増えてきており、自殺リスクを高める効果は「ウェルテル効果」、逆に自殺を抑止したりする効果は「パパゲーノ効果」と呼ばれています。

【国内外のガイドライン動向】

WHO（世界保健機関）が2019年に発表したガイドライン「[自殺対策を推進するために 映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識](#)」においても、テレビ番組、映画、動画配信での自殺の描写が、模倣自殺につながるなどの研究結果や、とくに若く自殺リスクの高い人は登場人物に自分自身を重ね合わせて、悪い影響を受ける可能性が高いことが報告されています。（同ガイドラインP.5）

また、23年4月に見直された「[日本民間放送連盟 放送基準](#)」においても、かなり踏み込んだ形で、自殺の誘発を避けるための「解説文」が新たに盛り込まれるなど、自殺の扱い等に関する記述が強化されました。

第1条 人命を軽視するような取り扱いはしない。

〈解説文（抄）〉自殺を取り上げる場合は、視聴者に対する影響を考慮し、報道であってもフィクションであっても慎重に取り扱う。

第48条 自殺・心中は、たとえフィクションであっても取り扱いを慎重にする。

〈解説文（抄）〉ドラマなどのフィクションはもとより、古典・芸術作品で自殺や心中を美化・礼賛するものも含め、取り扱いは慎重にすべきである。

【本勉強会について】

メディア向けの勉強会は、自殺報道に関するものを中心に実施してきましたが（2020年～2025年で8回。延べ約950人が参加）、一昨年末に、自殺の表現に関する映像・舞台関係者向けの勉強会を初めて開催しました。200人を超える映像制作関係者の方などにご参加いただき、アンケートでも下記のような反響をいただきました。

- ・映像表現をする上での留意点が具体的に学べた。（キー局プロデューサー）
- ・事例を合わせてとても丁寧にお話しただけだ。（映画会社プロデューサー）
- ・制作経験を踏まえたお話がわかりやすく、自分に置き換えたときの思考トレーニングにもなりました。（キー局・ディレクター）
- ・自殺表現の方法や演出を考えたときにカットすべきこと、見せない手段をとることと、物語として伝えられるものの線引きが難しいと思った。（映画会社・社員）

皆様のご参加をお待ちしております。お申し込みは下記URLまたは右記QRコードから

- 日 時： 2026年3月26日（木）13時00分～14時15分
- 対 象： 映像・舞台の制作・製作関係者・報道関係者・プラットフォーム事業者等
- 形 式： オンライン（Zoomウェビナー）
- 参加費： 無料
- 申込： <https://forms.office.com/r/4sdyP8angJ> **（3月23日（月）17時締め切り）**

